

戦争と文学

渡 邊 澄 子 (大東文化大学名誉教授)

War and literature

Sumiko WATANABE

はじめに

長期にわたる「安倍一強」政権下で安全保障関連法に続き「共謀法」が強行成立、施行された。軍事主義を支える法律である。ここに内包されるのはバターナリズム(家父長主義)やセクシズム(性差別)、レイシズム(人種差別)などで、これらのイズムが象徴的に現存しているのは沖縄だろう。沖縄をそのような苛酷な状況に固定化しているのは安保条約だと私は思い込んでいる。連日、反対運動に参加したあの頃の国民的熱気は今なお鮮烈だ。沖縄はこの法の壁に阻まれている。にもかかわらず、あれほどの反対を押し切って成立させてしまった安保法案が既成の事実視されている現状を国民は鈍感にも受け容れているように思える。人間とはそんなにも健忘症なのだろうか。

『大日本帝国憲法』を廃棄して、「文明が速やかに戦争を絶滅しなければ、戦争がまず文明を絶滅する」の思いのこめられた『日本国憲法』に守られて七〇年間日本は戦争による人殺しをせずに来られたが、近年、怪しさが色濃くなってきている。

先頃、この危機感を共有する仲間たちによって『昭和前期女性文学論』(2016・10、翰林書房)を上梓した。仲間とは一九九一年に設立した新フェミニズム批評の会のことで、大学院生も含む来日の外国人も自由に参加可能な小規模な文学研究会だが、ここでの研究発表を論文化した『明治女性文学論』(2007、翰林書房)『大正女性文学論』(2010、同)に続く3冊目であるが、その間に起きた衝撃的原発事故を『3・11フクシマ』以後のフェミニズム——脱原発と新しい世界へ』(2010、お茶の水書房)として刊行した。「昭和前期」は一九四五年の敗戦によって社会構造が大転換を遂げた区切りの時期まで一九二〇年代半ばからに絞ってその間の文学を論じたものである。

この時期は世界資本主義の飛躍的發展や第一次世界大戦前後のグローバル化によって社会の変動の激しかった時代であるが、一言で纏めてしまえば戦争の時代である。心ある文学者（もちろん文学者に限らぬが）にとつては生死につながる表現の自由圧殺の時代でもあった。小林多喜二に象徴される拷問による惨殺が待ち構えていた恐怖の時代であった。「昭和前期」出版時に時を同じくして現政権への危機感を共有する中川成美さんの時宜を得た書『戦争をよむ 70冊の小説案内』（2017、岩波新書）（注1）が刊行された。だが、ここに採取されている書は総て戦後作である。戦争を批判的に考えられるようになってからの作品は多い。新書に70冊となれば当然一作品についての説明は簡略となる。新聞連載文がもたっているのが当然だが、中川さんの研究姿勢による外国人による作品が数多く採り入れられていて目新しくこの本の特色にもなっているが、70冊の何十倍もでている日本人作家の欠かせぬ作品が抜けているのがもどかしい。この本の「あとがき」の最後の部分の、「戦後七〇年の声を聞くあたりから、一挙に具体化した憲法改正法案や戦争関連法案をめぐる論議、そして安全保障関連法（平和安全法制）、テロ等準備罪（共謀罪法案）が強行採決されたことは、不安を呼び覚ましてやむことはない。もはや、戦中にあるのかもしれない。」は私の現状認識と一致する。「文学は戦争とともに歩んだ」（中川成美）その文学を読むことで、戦争阻止への一臂としたい。

文学史における女性作家

昭和文学史はこれまでかなり書かれてきているが、そのほとんどが男性性によって書かれているので男性作家中心になっている。一九四一年生まれの川西政明によって書かれた『昭和文学史』（全3巻、01、講談社）には「二十世紀は女性の世紀で」、「二十世紀の日本文学は女性の時代という視点から読み解かるべき」なので本書では、この「不公平」を正すとありながら、女性作家の扱い方は男性作家と対等ではなく、「女性の世紀」（一）（二）の項目に括られ、しかも時代に則っていない。昭和前期に当たる上巻の「一章 昭和文学の出發」は芥川の死から始められているのに「女性の世紀」（一）は「先駆者列伝」とされていて、長々と述べられる中心は『或る女』のモデル佐々木信子と作中の葉子との関係で、その後に一葉、津田梅子、荻野吟子、田村俊子、伊藤野枝、菅野須賀子、金子文子について簡略に述べられているものの昭和期に入ってから仕事には触れられず、昭和期に入って活動開始の作家は無視されている。「二章 戦争下の文学」における「女性の世紀（二）」ではどうか。冒頭で採り上げられているのは野上彌生子だが、明治・大正期の作品「縁」と「海神丸」について詳述されていて、昭和期の作品『真知子』については彌生子についての文章の結びで「自己確立した」作として作品名が挙げられているのみである。続いて採り上げられている佐多稲子、壺井栄、中条百合子、岡本かの子、平林たい子、林芙美子、円地文子、大谷藤子、矢田津世子、網野菊、中里恒子、野溝七生子、宇野千代などは長短ばらばらだが極めて簡略に履歴を述べているだけでこの時期の作品には無視の態度で貫かれている。要するに「女性の世紀」を位置づけながら女性文学の文学史の

ていをなしていない。

女性作家の活躍

いわゆる一五年戦争と言えば一九三一年の関東軍によって奉天で開始された軍事行動に発する満州事変からとされている。この時の小競り合いが大戦争に発展するとは誰も思っていなかった。この満州事変にしても「支那兵が満鉄線を爆破し、わが守備兵を襲撃したので」「応戦」して戦闘になったとされてきているが、実は関東軍の策謀で、口実を作る為に奉天の守備隊の兵が上官の命令で爆破したのであって、板垣・石原中心による筋書きだった(『日本の歴史』中公文庫)という。それより以前、堺利彦らが検挙された第一次共産党事件(1923)、続いて大震災の混乱に乗じての平沢計七らの虐殺(亀戸事件)、大杉栄・伊藤野枝・大杉の甥の少年虐殺(甘粕事件)、流言・蜚語による朝鮮人や中国人等の虐殺事件に象徴されるようにすでにファシズムは台頭し始めていたが、第一次大戦後の欧米文化の流入で近代化が進み、金融恐慌による社会混乱の一方で円本合戦が到来して作家達を潤おさせたが、思想統制も厳しくなり、治安維持法公布(1925)で発禁が相次ぐようにもなっていた。『種蒔く人』が蒔いた種からプロレタリア文学が芽を出し、プロレタリア文学隆盛の時代を迎えることになるが、芥川龍之介が「ほんやりした不安」と書いて自裁したのは一九二七年のことである。プロレタリア文学の隆盛は、弱者として下位視されていた女性作家たちの活躍を促進させることになった。昭和初年(1927)からの平林たい子の活躍は目覚ましい。「投げすてよ!」「治療室にて」「夜風」「残品(後)」「嘲る」「荷車」「殴る」「敷設列車」等々佳作を立て続けに発表している。「キャラメル工場から」から出発した窪川いね子(佐多稲子)の登場、同伴者作家の代表に位置づけられた野上彌生子の「真知子」の連載も二八年からである。「A 鉾山の娘」や「風呂場事件」で作家登録を得た松田解子の発表舞台は平林や佐多たちもだが『解放』『プロレタリア芸術』『戦旗』『文芸戦線』等プロ文関係の雑誌が多い。これらの雑誌が果たした功績は大だろう。女性作家誕生の功績に大きく寄与したのは、林芙美子の『放浪記』を載せ、上田(円地)文子、矢田津世子その他何人もの優れた作家の発表場所となった長谷川時雨によって創刊された『女人芸術』である。

ところで、長引いて泥沼化した戦争の始まりになるとは誰も考えていなかった盧溝橋での衝突を発端とした日中戦争は一九三七年七月からである。前年から日本軍は盧溝橋近くで三千から五千の兵による夜間に至る演習を余念なく行っていたのを、日本軍の攻撃の前触れかと中国側は警戒態勢を強めていたとき、演習終了の伝令に向かって誤って機関銃の空弾が三、四十発打ち込まれた。するとどこからか数発の実弾が撃ち込まれた。夜の十一時頃のことである。日本軍はすぐに中国側に反撃に出て「宣戦なき戦争」となったらしい。日本軍の伝令に向かって日本軍によって誤って発射された空弾を中国側の発射と思い込んで日本軍兵士が反撃したのか、空射音を夜陰に紛れて日本軍が攻撃をかけてきたものと判断して慌て

て攻撃をかけた中国軍だったのか、いまだに不明という（『日本の歴史』）。戦争の発端は些細な誤解や猜疑心、先走り、手違いなどに起因する場合が多い。

満州事変勃発の頃は不況激化の影響もあつて学生等の左翼思想事件は頂点に達し、労働罷業戦前最高（1931）記録の年だが、ここには激増した女性労働者の運動も含まれているが、その一方で学生の右翼組織も拡大をみせている。社会の騒然さのなかで女性文学は活気を呈している。林芙美子『清貧の書』『鷺』『泣き虫小僧』『杜鵑』『牡蠣』『稲妻』など、尾崎翠の『こほろぎ嬢』『第七官界彷徨』、中条（宮本）百合子の『一九三二年の春』『乳房』『ヒューマニズムへの道』、平林たい子の『没落の系譜』『エルドラド明るし』、宇野千代の『色ざんげ』『文学的自叙伝』『別れも愉し』、小山いと子『海門橋』、野上彌生子『若い息子』『哀しき少年』『黒い行列』、大谷藤子の『伯父の家』『半生』『須崎屋』、吉屋信子『女の友情』『良人の貞操』、窪川（佐多）稲子の『牡丹のある家』『くれなゐ』、矢田津世子『神楽坂』、相馬黒光『黙移』、岡本かの子『混沌未分』『鶴は病みき』『母子叙情』、中里恒子『西洋館』その他、意図的に戦争肯定をほじくりだそうとして深読みすればあるかもしれないが、総じてこれらには戦争肯定、指駭の意図は見られない。

この間にコップ大弾庄、中条百合子・中野重治ら四百名もの検挙、五・一五事件、大日本国防婦人会創立、小林多喜二の虐殺、佐野学・鍋山貞親の獄中転向声明、コップ加盟十団体解散、文部省に思想局設置、中条・窪川検挙、二・二六事件、メーデー禁止、内務省の言論取締強化方針明示、警保局特高課治安警察の強化拡充決定等々の表現の自由抑圧政策が急ピッチで進んでいたことを考え合わせると、これらの作品創出は見事といえるだろう。

男性作家においても永井荷風の「つゆのあとさき」「ひかげの花」「墨東綺譚」、『中野重治詩集』（製本中に押収）、「村の家」「小説の書けぬ小説家」、梶井基次郎「のんきな患者」、新美南吉「ごん狐」、丹羽文雄「鮎」、武田麟太郎「日本三文オペラ」「銀座八丁」、林房雄「青年」、尾崎士郎「人生劇場」、小林多喜二「転換時代」（後に「党生活者」）、石坂洋次郎「若い人」、谷崎潤一郎「春琴抄」「陰翳礼賛」「猫と庄造と二人のをんな」、広津和郎の「風雨強かるべし」（同伴者文学）「散文精神について」、堀辰雄「美しい村―或は小遁走曲」、尾崎一雄「暢気眼鏡」、横光利一「紋章」「旅愁」、島木健作「癩」、三好十郎「天狗外伝 斬られの仙太」、村山知義「白夜」、牧野信一「鬼涙村」、中原中也「山羊の歌」、山本有三「真実一路」「路傍の石」、坪田譲治「お化けの世界」、石川達三「蒼氓」、小熊秀雄「小熊秀雄詩集」、徳田秋声「仮装人物」、阿部知二「冬の宿」、北条民雄「いのちの初夜」、高見順「描写のうしろに寝てゐられない」「故旧忘れ得べき」、石川淳「普賢」、太宰治「晩年」、志賀直哉「暗夜行路」、立原道造「萱草に寄す」などその作家の代表作となったものもあり、この時期が戦争の泥沼化に伴って思想・言論の圧殺激化の急進過程であり、その官権力に屈した佐野学・鍋山貞親の獄中からの転向声明が出された（1933・6）時節でもあったことに感慨をそそられる。佐野・鍋山の転向声明の影響は大きく、獄中にあった人々の九割が転向したといわれ、転向文学盛行時代が招来されるもの、上記作品に象徴されるように文学はまだ健

在といえる状況が保たれている。

転向の中味は複雑微妙である。文字通り芯から転向して戦争勢力の体制側に就いた者もかなりいたが、多喜二に象徴される拷問死への恐怖から偽装転向した者も多かった。偽装だったなどと告白できぬ良心の呵責への苦悶は中野文学が感動的に表現している。

日中戦争後の政治・社会

すでに何度も書いてきているので、戦時下文学理解上、ほんのポイントのみ羅列する。「大日本帝国憲法」「教育勅語」「民法」によって法的に無能力者に固定化され、わけても「教育勅語」の徹底教育によって、天皇・男性・夫に絶対服従が「正しき女性」と擦り込まれてきていることを政権は逆手に利用して、戦場に駆り出されて労働力不足の男達の穴埋めに使うようになり、「正しき女性」を模範的に生きようと愛国婦人会は各地で時局大会を開催して銃後家庭強化運動を展開し、国民精神総動員中央連盟結成公布、大本営設置下で、大虐殺事件を伴う南京占領に旗を振って歓喜し、始まった勤労働員に精励するようになる。このような動向下で、戦争を示唆する国策文学の盛行と相俟って言論弾圧激化で筆禍事件続出、米穀配給統制法公布、米・味噌など生活必需品の切符制、内務省による左翼出版物の弾圧強化で発禁・紙型押収・古本屋在庫まで検索、大政翼賛会発会、紀元二六〇〇年式典、長谷川時雨の努力によって女流文学者会議発足、文化統制強化で内閣情報局発足、文芸銃後運動として文学者が各地で講演、総合雑誌編集部に執筆禁止者リスト提示、改正治安維持法公布で予防拘禁制開始、太平洋戦争勃発、出版物規制強化、文学者の報道班員として外地行き盛ん、東京・名古屋・神戸などに空襲(42・4)、文部省が戦時家庭の在り方として日本婦道に則った国策順守通達、日本文学報国会創立、大日本言論報国会設立、「欲しがりません勝つまでは」「産めよ殖やせよ」の標語高叫、陸軍報道部が雑誌表紙に「撃ちてし已まむ」の標語掲載指示、一二人以上の子を産み、また、四人もの息子を戦死させた母を表彰、アツツ島(玉碎)、女子勤労働員促進、国民兵役四五歳まで延長、徴兵一九歳に引き下げ、野草の食用奨励、中等学校の英語廃止、国民総武装閣議決定で竹槍訓練、女子挺身勤労働令、兵役一七歳、神風特攻隊、B29東京初空襲以後各地に空襲激化、大本営が本土決戦決定、女性誌発行許可は軍部に密着・隷属した『主婦之友』一誌のみ、沖繩で悲惨な地上戦展開、そして陥落、広島・長崎に原爆投下、ポツダム宣言受諾で敗戦により終戦。内務省が占領軍向け性的慰安施設設置に際して「新日本女性に告ぐ」と接客婦募集(45・8)と慌ただしく進んで、戦争は敗けて終わった。

以上は日中戦争開始から敗戦までの八年間の事象の上撫でに過ぎないが、施策のテンポの早さに比例して、教育勅語で作られたよき女性であるうとして、女性達の実態・男性への真剣・熱烈な従属が戦争の犠牲者から主体者へと変容を遂げていった過程と見ることが出来ないだろうか。

戦争後期の文学

プロレタリア文学昂揚期となった昭和初期は新しいプロレタリア文学のあり方を巡って理論の四分五裂で混乱しながらも最盛期には左翼雑誌が著名商業雑誌を抜くほどの発行部数を誇ったが、それは女性作家の活躍・育成を促すことにもなった。育てられた女性作家は「教育勅語」が血肉化されていた世代だった。天皇の承認のもとで男が始めた戦争をひたすら応援するのが「正しい女性」のあるべき生き方とされて、批判や不平の大声を自ら封じて艱難に耐えなければならず、まさに女性性は戦争の犠牲者だった。視点を変えれば、その「教育勅語」の犠牲者の代表は長谷川時雨と言えるだろう。彼女の優れた芸術的感性と行動力によって創刊された『女人芸術』（1928・7～32・6）が女性作家育成・活躍に果たした功績の大きさを否定する者はあるまい。創刊年は奇しくも共産党員全国的大檢舉（三・一五事件）のあった年で、檢舉者の受けた拷問の惨虐さを天皇制国家の暴虐として鋭く告発した多喜二の「一九二八年三月一日」が書かれた（発禁・削除・伏字復元の原作刊行は1948年）時期で、プロレタリア文学高潮期にあたるが、組織とかイデオロギーとは無縁に時雨の心意気から女性の表現意欲の發揮場として『女人芸術』は夫の三上於菟吉の資金援助によって刊行されたのだった。だが既に激動の時代にあつて創刊号冒頭に秋田雨雀・湯浅芳子他と共に写っている「モスクワに於ける中条百合子氏の近影」が掲げられ、山川菊栄「フェミニズムの検討」、神近市子「婦人と無産政党」、望月百合子「婦人解放の道」が「論評」として載っている。編集後記に時雨は、「いま全世界で、この日本の女性ほど健かにめざましい生育をとげつゝ、あるものがあらうか?」「同性の」「なみだくましい勇躍」に「あたしもその潮にをどりこみ、波の起伏に動きたいと祈る」と記している。「潮」を単純、素直に読めばプロレタリア文学高揚の潮流を意味するが、時雨がこの潮流に飛び込んでプロレタリア文学作品を書き、また危険覚悟の運動に身を投ずるとは時雨の思想上考えられず、解せない。林芙美子の「放浪記」の発端となる「秋が来たんだ」や上田（円地）文子の作家出発となる「晩春騒夜」が載ったのは第一巻第四号（1928・10）で、新興芸術派と競いながらプロレタリア文学盛行期だった。だが間もなく厳しい弾圧の時代に入り、左翼系雑誌が次々潰されたことで、そこを發表舞台としていた作家たちの『女人芸術』への流入によって『女人芸術』は発禁が重なり、恐慌の影響もあつて資金繰りの行き詰まりに追い打ちをかけるように時雨が臥床の身となったことで『女人芸術』は四十八冊を以て廢刊の憂き目をみることにした。だが、時雨の女性表現者応援の情熱は衰えず、僅か四ページのリーフレットの『輝ク』（1933・4～41・11）を創刊した。創刊の信条として掲げられたのは「黎明は近づく——われらのゆく手！ さんさんたる光の中に立つわれら！」で、題字の右横に付されている。多喜二が虐殺される（注2）、転向者が続出し、プロレタリア作家同盟ははじめこの種の組織が次々に解散させられている厳しい状況にあつて「近づく黎明」とは何を意味するのだろうか。当初は、諸ジャンルにわたる文学のほか男性講師の講演要旨、海外通信などのほか、ピクニックなど会員の仲好し倶楽部的様

相が紙面を埋めていたが、三十七年の日中戦争開始で戦争示唆誌に一変する。一例として岡本かの子の巻頭言を挙げてみよう。

わが将士を想ふ言葉

出征軍人将士となりたまふ時、日本男子は既に神なるを感じる。一體光る。その萬體の光合して今、唐土の野に肅々と進み給ふを感じる。／今し、日本の秋の金風に鬣を振つて出で立たんとする軍馬も亦、神の光を放つ。人間の女の私がふかく／頭を垂れて袂別の禮をばなせり。／何故に戦ふかを問ふは既に人類中の閑人である。既に戦ふ現象中にあつて、誠意それに當つて勝つこそよけれ。人力以上の気魄あつてこそ大敵に勝つ。たとへ寸時分時の敗れありとも大局に於て勝つ。武器は双方にあつて備ふるところ。誠意と優秀なる気魄を備へ、人類の絶頂所に達したる勇偉切実なる魂あつて遂に勝つ／あ、一心凝つて大君を想ひ、祖国同胞を憐むが為めに身を忘れて戦ふ勇士よ。／たましひ光り給へるわが日本の将士達よ。君達を遠く送りに淋しけれども、今、日本の秋は暗れて国士豊穰のみのに恵まる。／女子は、もすそをか、げて街路の役に、また慎ましく賢き家居に、おん身等が残したまへる父母、愛し妻、可憐なる子達の護りに、いそしみつ、あり。今や君が祖国の、日本女性等こそ、君達の男々しき光に對照して、優しく凜々しき光となり銃後の国に充ち満つるを知り給へ。／さらば、朝には朝の陣を、夜はまた遠き夜陣の君達をひたすら想ふ祖国日本の女性より。

(37・10)

トーンは激烈だが意味不明の文章だ。代表作のひとつ「老妓抄」執筆の頃の文章と思われるが、「家霊」「鮎」などの名作を書いて一年後に亡くなる(1939・2)作家の文章とは思えない不快さだ。だが、この文章はこの号を時雨が「皇軍慰問号」と銘打つたことに応えたものだろう。かの子がこのような文章を発表したふた月後の十二月に労農派が多数検査された人民戦線事件が起きて、逮捕にきた官憲の目を盗んで逃げた夫小堀甚二関係で参考召喚され、小堀自首後も平林たい子は八ヵ月間に及ぶ劣悪な環境下での留置で重病となり、瀕死状態になってようやく釈放されたが、文学仲間や仮釈放後の小堀の献身的看護以上にたい子の生きる凄絶な意欲によって死の淵を何度も覗いた程の五年間の闘病期を奇跡的に乗り切つてペンを使えるようになったが、後日恥じるようなことは書けぬと、戦争肯定文しか書けなかった時代を書かずに貫いたことを文学史は無視しているが高く評価されるべきだろう。

戦後の視点に立てばまだ迫切状況では無かったが、時雨は率先して『輝ク』の戦争使喚誌性を深めることに熱情的になっている。「婦人の立場より時局認識を深め、国策に添ひたる婦人向上及国家奉仕の実現に努力」を「目的」とした「規約」を掲げて「輝ク部隊」を編成し、「輝ク慰問袋」作りを競わせ、毛布などと共に陸軍省恤兵部に献納し、満蒙青少年義勇軍慰問の為の寄付金を募り、傷兵家族慰問会、在満青少年義勇隊に書籍や日用品を送る運動を展開し、軍から感謝状を貰うと慰問袋作りに拍車をかけ、三十九年には「輝ク」部隊の組織固めから「目的」を「婦人の立場

より時局認識を深め、国策に添ひたる婦人向上及国家奉仕の実現に努力」と明記して広く会員募集を行っている。評議員には宮本百合子・中本たか子・窪川稲子なども名を連ねている。発会式には陸軍省や海軍の軍人の講演がなされ紙面に掲載されている（以後、急速に時雨と軍部との親密度は深まり、軍人による講演増える）。遺児の日を年中行事にし、白扇に短歌など揮毫して贈ることを考案し、白扇購入の資金寄付を募り、傷病戦士慰安会・病院慰問（以後、傷病兵・出征兵士家族・遺児や出征兵士遺家族慰問は頻繁）、慰問袋献納、白扇購入のための自著献本、揮毫白扇等の数を氏名公表で競わせている。ある月を例に挙げると時雨三〇冊、火野葦平二六冊、中本たか子二〇冊とあり、ある月は時雨三三冊、中本たか子・宮本百合子十冊などもあり、自著のない人は金銭でと額と名前が公表されている。生活困窮者にとっては辛いことだったろうと想像される。集めた著書を銀座の街頭で作家自らが販売活動したことの体験を円地文子書いている。

四十年には「輝ク」部隊員による「渡支慰問班」がまず宮城・明治神宮を参拝してから漢口・南京慰問に出発、その報告が紙面を占めるようになる。軍人慰問に陸軍病院長や海軍大臣から「感謝状」が送られ時雨を喜ばせる。まさに「教育勅語」徹底教育の成果（注3）だろう。四十年十一月号は「紀元二六〇〇年」を祝う増頁号で、「みたみわれのよろこびにいや高くかかげられたる一億のいのちはたゞひとすじに大君に帰一し大御心の顕現に翼賛しまつることのかしこさ」を含む巻頭言を平塚らいてうが、続いて高群逸枝が神武天皇期から女性の歴史を述べ、「明治維新となって階級制は廃され、女性の生活も急激に変化」したが、日支事変後は「女性の各種生産面への参加や、銃後奉仕」の「活発」化で女性に「転機」到来と書いている（二人に戦後、反省、懺悔の発言なし）。この年、一月一日発行で「輝ク部隊」編集による戦地の兵士慰問の慰問文集が作られ、陸軍恤兵部発行の『輝く部隊』（稲子が小説、百合子は随筆を掲載）、海軍省恤兵係監修の『海の銃後』と翌年に続けて『海の勇士慰問文集』（41・1・1）が刊行されているのみか、海軍記念日には一週間にわたって日本橋高島屋で催事を行っていて海軍大臣から感謝状を贈られている。四十一年一月四日神戸から、蒲柳の質の時雨中心の輝ク部隊員による南支方面慰問団が発している。

時系列を無視して差し挟むことになるが、著名女性文学者中、真っ先に戦争謳歌・使喚行動にひた走ったのは與謝野晶子である。『街頭に送る』（1931・2、講談社）、『優勝者となれ』（1934・2、天来書房）の表題が示すように満州事変勃発前から鋭い先見性から風雲を察知して如上の二冊の前者では、労働争議の激化、学生の左翼化進行の時期だったが労働争議の指導者を「我我無産階級を煽動することを以て衣食する不労有閑の職業的指導者」ときめつけている。オビニオン・リーダーと自他共に認知されていた晶子の自分を「プロレタリア階級」「無産階級」と何度も使つての位置づけには、社会科学のイロハも知らぬと嗤ってしまいが、太平洋戦争末期にとられた残酷悲惨な戦術の特攻隊の先蹤となる「肉弾三勇士」の美談が戦争熱を煽り、各新聞社が勇士を称える歌を懸賞募集した。『東京日日新聞』に応募して一等入選し、五百円の賞金を得、陸軍軍楽隊による作曲・演奏でレコードに吹き込まれて販売され人々を鼓舞したのだが、作詞者は当事慶応大学教授職にあった與謝野寛だった。晶子も「夫唱婦随」で勇士を称える詩を作っている。だが、「爆弾」「肉弾」三勇士の話は戦意昂揚のための作り話の美談だった。戦争遂行のためには権力

は呆れた作り話も平気でして民衆を欺すのだ。後者の『優勝者となれ』はさらに天皇の威徳を称え、出征した愛弟の無事帰還への祈りを歌ったので天皇批判・反戦詩ではない(注4)。「君死にたまふこと勿れ」に通ずる天皇・皇室絶対視による戦争のプロパガンダを積極的にはたしていたのだ。戦争のプロパガンダの初期の功績者は吉屋信子と林芙美子だが、この二人についての論考は多いので省筆する。

教育勅語によって培われた時雨の「愛国心」は、病弱の身の不安を凌ぐものだったのだろう。だがやはり時雨には無理だった。帰国後病臥生活が続く四十一年八月二二日、六十年の生涯を閉じることになった。常に側について時雨の助手役を務めていた熱田優子によると、死の間際の言葉が「送ったかい、送ったかい」だったという。すぐに慰問袋のことだとわかったという。瀕死の病床にあつてなお、もっともつと、将兵が真に喜ぶような慰問袋を送り続けなければならぬと一心に考えていたのだろう。太平洋戦争勃発を知らずの他界だったが、もし、命長らえていたらどうだっただろうか。

横道にそれるが、高村光太郎の太平洋戦争勃発時の詩を挙げてみよう。

真珠湾の日

宣戦布告よりもさきに聞いたのは／ハワイ邊であつたといふことだ。／つひに太平洋で戦ふのだ。／詔勅をきいて身ぶるいした。／この容易ならぬ瞬間に／私の頭脳はランビキにかけられ、／昨日は遠い昔となり、／遠い昔が今となつた。／天皇あやふし。／ただこの一語が／私の一切を決定した。／(中略)／私の耳は祖先の声でみたされ、／陛下が、陛下がと／あへぐ意識は眩いた／身をすてるほか今はない。／陛下をまもらう。／詩をすてて詩を書かう。／記録を書かう。／同胞の荒廃を出来れば防がう。／私はその夜木星の大きく光る駒込台で／ただしんげんにさう思ひつめた。

『暗愚小伝』より

光太郎は「神国日本」の勝利を信じきって若者の出征を勇気付け、特攻隊の勇猛果敢な功績を大本営発表通りに信じて山ほどの戦争詩を創っている。戦後、彼の詩に励まされて死んで行った多くの若者の人生を思い、「わが詩をよみて人死に就けり」と慚愧して花巻の山上の三畳の小屋に蟄居した光太郎は、戦争謳歌者が戦後平然と平和主義者に豹変した多くの人とは違う。時雨が生存し得ていたら光太郎の「真珠湾の日」よりもっと激しく「身ぶるい」して「輝ク」部隊を前進させたのではないだろうか。時雨の戦争犯罪性は重い。

本論に戻ろう。時雨の熱心な運動によって大政翼賛会文化部の下部組織として「新体制運動に参加」目的で「輝ク会」を母胎とした「日本女流文学者会」が設立されたのは四十一年四月のことである。慰問運動促進に寄付金需要は際限がない。範を垂れた時雨の二百円の額に対して困窮生

活者の五円、四円五〇銭、二円が名前をげて公表される心情を想像すると辛くなる。時雨から要請されたのか菊池寛が五十円のほかに著書も寄贈して白扇への揮毫は宮本百合子もしている。

時雨の慰問袋贈呈数増量熱意は強く、軍部と懇談を重ねて、輝ク部隊主催、陸軍省恤兵部・海軍省後援で「前線の勇士」が喜ぶような新案・新工夫の慰問袋を懸賞募集し、審査し、佳作に賞状・記念品を渡すという企画を打ち出すほどの熱の入れようには感慨を禁じ得ない。

時雨が戦争示威に文字通り献身していたこの時期の政治・社会は戦況一進一退の泥沼化が続いていて、戦時体制は人民戦線運動関係者の大量検挙、第二次検挙、国家総動員法公布、勤労動員始まる、灯火管制規則実施、国民徴用令公布、大政翼賛会発会、文化統制強化に伴う内閣情報局発足、文芸家協会主催の文芸統後運動の講演会各地で開催、治安維持法改正公布で予防拘禁制が始まるという状況下でプロレタリア文学は撲殺され、転向文学も盛りを過ぎていたが、治安維持法違反を口実の検挙は日常茶飯事になされていた。にもかかわらず、注意深く検挙をすりぬけて名作・佳作が生まれている。ほんの代表的作品を挙げてみよう。岡本かの子の「金魚撩乱」「東海道五十三次」「老妓抄」「家霊」「鮪」のほか一平による入手の説もある没後発表の「河明り」「生々流転」「女体開顕」、中本たか子「南部鉄瓶工」、小川正子「小島の春」、板垣直子「戦争文学批判」、宮本百合子「杉垣」「三月の第四日曜」「明日への精神」、窪川稲子「樹々新緑」「素足の娘」、中里恒子「乗合馬車」（女性で初の芥川賞受賞）、「日光室」、壺井栄「暦」、小山いと子「4 A格」「熱風」「オイル・シユール」、矢田津世子「茶粥の記」「鴻ノ巣女房」、野溝七生子「女獣心理」、林芙美子「魚介」、芝木好子「青果の市」（戦時統制経済国策に批判的な部分の書き直しの上、女性二人目の芥川賞受賞）などは今に至るも批評に堪える作品である。男性作家に目を転ずると、金子光晴「鮫」、島木健作「生活の探求」、久保栄「火山灰地」、石川淳「マルスの歌」（発禁）、「白描」、石川達三「生きてゐる兵隊」（発禁）、中山義秀「厚物咲」、中原中也「在りし日の歌」、火野葦平「麦と兵隊」、中河与一「天の夕顔」、坪田譲治「子供の四季」、草野心平「蛙」、高見順「如何なる星の下に」、太宰治「富嶽百景」「走れメロス」、加藤楸邨「寒雷」、中野重治「歌のわかれ」「斎藤茂吉ノート」、三好達治「艸千里」、花田清輝「錯乱の論理」、織田作之助「夫婦善哉」、伊藤整「得能五郎の生活と意見」「典子の生き方」、山之口鏡「山之口鏡詩集」、堀辰雄「菜穂子」、船橋聖一「悉皆屋康吉」、徳田秋声「縮図」（権力によって中絶）、高村光太郎「智恵子抄」、三木清「人生論ノート」、三島由紀夫「花ざかりの森」、小田切秀雄「万葉の伝統」など軍国主義批判を巧みに秘めた作品もふくめて結構秀作がみられるが、一方でプロレタリア文学運動壊滅後のロマン主義思潮台頭から詩精神の高揚と古典復興主張の雑誌として創刊（1935）され、一時多くの作家を呼び込んだ『日本浪漫派』の代表者保田与重郎の『戴冠詩人の御一人者』『後鳥羽院』も挙げねばなるまい。この派は戦時体制の深化を肯定した「大君の辺にこそ死なぬ」の哲学に落ち込んでいく。

太平洋戦争下の文学

日本の真珠湾攻撃に始まる太平洋戦争は無謀としか言いようがない。国民は防空頭巾、もんぺ、ゲートルの戦闘体制を命じられ、出版物の規制強化で書きたい事が書けないばかりか、命の危険に曝される時節に入る。当然、文学不毛の時期だが、作家は書かねば生活できない。発禁・執筆禁止を避ける手立ては戦争肯定のプロパガンダ作だろう。肯定し得ない思想の作家は戦争批判を遠回しに書くが見抜かれて発禁。さらに遠回しを続けるうちに何時しか協力作になってしまっているということになる。彼等の苦悩は深いが、本気に意図的な戦争文学が巾を効かせるようになり、それが読者からも歓迎される時代になっている。

戦争肯定作では無いこの時期の作品としては宇野千代の「人形師天狗屋久吉」「白露の戦間書」、後に自伝的大河小説『長流』に成る島本久恵の断続連載作、母の死を巡る日常話の野上彌生子の「明月」、鷹野つぎの『限りなき美』くらいだろうか。男性作家には戦争を巧みに避けた作品に見るべきものがある。中島敦の「光と風と夢」「李陵」、川端康成の「名人」、富田常雄『姿三四郎』、森田草平『夏目漱石』、谷崎潤一郎『細雪』(軍部の強圧で途中で掲載禁止)、島崎藤村『東方の門』(死去により中絶)、武田泰淳『司馬遷』、徳永直『光をかゝぐる人々』、三島由紀夫『花ざかりの森』、太宰治『津軽』、竹内好『魯迅』など厳しい現実をすり抜けて己の文学を打ち出している。一方では戦争勢力に阿った作品が多く生み出されていて、日本文学報国会による『辻小説集』『大東亜』が編集されている。『中央公論』『改造』などの編集者が謂われなき冤罪だが治安維持法違反によって検挙され獄死者もだした「横浜事件」は四十四年一月のことだが、両誌は七月に廃刊命令がくだされている。共謀罪の恐ろしさの好例として忘れられてはならない。

既に戦局は敗北が目睫の間に迫っていたのに政府は本土決戦論が優位をしめていた。四十五年三月十日の東京下町大空襲は六トン以上の焼夷弾を搭載したB29の機銃掃射によって焼き尽くされ、焦土と化した街は阿鼻叫喚の巷となった。犠牲者数の真実は今に至るも不明という。この空襲ですべてを失った永井荷風の『断腸亭日乗』の叙述はリアルで「断腸之哀」にとらわれるが、大本営発表は「B29約百三十機、昨暁、帝都市内を盲爆、約五十機に損害、十五機を撃墜す」(十一日)、十二日の新聞は被災状況の報道皆無で、「起上らしめよ罹災者、国民・果敢な号令を待つ」「全都民まさに戦士」とあるのみで、「神州敵の窺窺を許さず」「数千年の底力發揮、敵上陸せば殲滅、作戦に呼応、必勝策強行」の首相の決意表明をトップに、陸相の「比島に敵廿萬釘付け」、海相の「敵を洋上殲滅」などのでたための戦勝戦況報告が報道されている。(注5) 小学校では「(略)日本ヨイ国キヨイ国/世界ニ一ツノ神ノ国/日本ヨイ国 強イ国/世界ニカガヤクエライイ国」が歌われ、神国日本は必ず勝つと本気に信じた国民も多かったという。特攻隊による赫々たる戦果を誇大に報じているが、現実とは真逆の絶望的事態に追い込まれていた。決定打となる原爆が「世界

ニカガヤクエライ」「神ノ国」に投下されたのは八月六日午前八時十五分のことだが、報道は二日後の八日に「広島に敵新型爆弾／B29少教機で来襲攻撃／相当の被害、目下調査中」とのみで、敵のこの爆弾の誇大宣伝は「焦燥」の現れゆえ迷わされることなく防空を強化せよと抗戦をよびかけ、「新型爆弾に勝つ途」として、待避壕が極めて有効、軍服程度の衣類を着用し、防空頭巾・手袋で火傷は完全に防げる、壕に入れぬ咄嗟の時は地面に伏すか堅牢物の蔭を利用すればよい、「新型爆弾もさほど怖れることはない」とある。九日の長崎への原爆投下は三日後の十二日になって「八月九日午前十一時頃敵大型二機長崎市に侵入し、新型爆弾らしきもの使用せり／詳細目下調査中なるも被害は比較的僅少な見込み」とした五行の記事のみで以後記載はない。これが大本営発表である。原爆の威力に対する無知蒙昧さには言葉もないが、沖縄への核持ち込みの密約のみならず国民の知らされないアメリカ隷従の密約は防衛費関連はじめ様々な面に多々あるのではないだろうか。

おわりに

戦争の出来る国に向かつての様々な法案が「一強」政府にとって急ピッチで進んでいる現況への危惧からここ数年、今頃と笑われるだろうが侵略戦争の実態を調べている。韓国の植民地化による侵略のおぞまじさは本誌に『国民文学』論として発表してきたが、旧満洲を満州里から哈爾濱まで南下する旅をして、世界四大草原の一つと言われているらしいが、その草原の広大さはテレビなどを通しての認識と隔たりの大きさに「百聞は一見に如かず」の真実を実感した。この感動は書籍を通じての知識では真実に迫り得ぬとの感じを強め、自分の根・肌・感覚で実感したいと思ひ、日本帝国主義の侵略の跡を辿る旅を始めている。日本の侵略の跡を辿る前にまずアウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所に行った。ビルケナウ収容所はアウシュビッツどころではない規模で、人間が人間を殺す殺し方だけでなく人間の尊厳を踏みにじる人間とは何だろうか、深く考えさせられたが、さらに言葉を失ったのは七三一部隊についてだった。小規模学会の小人数でのツアーで行ったときは生憎「罪証 陳列館」は新装改築中で入館不能だったのが諦めきれず、完成と知って一人での個人旅行で行った。戦時下、多くの作家達が軍のなかば強制で戦地視察、前線兵士慰問に出かけた時泊まった、当事、ハルビン第一のホテルだったヤマトホテル（現在は「龍門貴賓楼酒店」となっていて、欧米系のホテルが第一でここは第二らしいが泊まってみて建造の立派さに納得）での豪奢なものでなしに改めて感慨を深めた。その頃の日本は米をはじめ日用品をふくめて何もかもなく、餓死者もでるほど追い詰められていたが、あるところにはあつたらしく、飽食目当てで徴用の声のかかるのを待ち望んだ人もいたらしい。川上喜久子に『フィリピン回想』と言う本がある。陸軍報道部の派遣による三宅艶子と昭和一七年十一月末からまる四ヶ月のフィリピンでの生活の正直な日記であるが、一九八四年十一月になって刊行したということは、日本内地の人々の悲惨な生活とは雲泥の贅沢満喫を恥じる気の全く無いことを意味するだろう。当地で一緒になった男性の作家も多く、連日の会食はまさに飽食生活で観劇その他、芸者を上げての遊興

も多く、家族へのお土産探しの散歩も悪げなく書かれている。

川上喜久子のこんな体験話より私を捉えて放さないのは七三二部隊である。敗戦が目睫の間に迫り、ロシア軍進攻を察知すると石井隊長は巨大な施設を爆破し、「マルタ」と呼ばれた生体解剖用に残されていた検体を虐殺していち早く日本本国に逃げ帰ったので、生き証人は一人もいず、逃げられなかった中・下層の軍人・軍属はロシア軍の捕虜になって裁判にかけられ苦悩を強いられたが、帰国したお偉いさん達はアメリカに生体解剖のデータを渡すことで戦犯免責どころか、持ち帰った資料によって東大や慶応から学位を得たり、大学教授になったりの悠々自適の生涯を送っていたことを知ると、心が煮えたぎる。ドイツの場合とのあまりの違いを許していいものだろうか。二八冊もの（生き証人は一人もいないのにこんなにも本が出ているのだ）本を買って今、勉強中である。

最期に一言付け加えたい。日本統治時代の樺太にも行ってきた。考えることは多すぎるが、強烈だったのはまだ神社の鳥居跡、手水鉢、狛犬などが残っていたことへの驚きだったがさらに言葉を失ったのはトーチカや奉安殿が複数残っていたことだ。この衝撃は今、ことばにならない。改めて書くことにしたい。

(注1) 『週刊読書人』(17・9・29)が拙稿書評掲載。

(注2) 私が佐多稲子さんから直接聞いた多喜二虐殺について。

警察からは死因は「心臓麻痺」と告げられたが、母のセキは、心臓なんて悪くない、丈夫な子だったと叫んだという。遺体は渡さないといいのを奪取してきて仲間の前で全身包帯に巻かれていたのを、仲間の医師が取り除いたのを見た全員は揃って息を飲んだという。全身が紫色に腫れ上がり、血潮のみか性器が風船のようにふくれ、足や掌には無数に五寸釘を打たれた跡があったという。拷問の残虐さに仲間間は震えたとも。多喜二虐殺の報に接して駆けつけてきた仲間達は片端から検束されて留置所が溢れたという。

(注3) このような「教育勅語」を安倍首相、その妻は称賛している。

(注4) 拙稿「與謝野晶子論——君死にたまふこと勿れ」(『昭和学院短大紀要』、1977・3)及び『與謝野晶子』(新典社、1998・10)参照。

(注5) 「言わねばならぬこと」(『現代文学史研究』第二十集、現代文学史研究所、2014・5)に大本営発表を詳細に記載。